

かかしのはなし

土野孝太郎

村のかかしに眼鏡をかけさせてやろう、というのが彼女の思いつきで、それはかかしが人々の暮らしを見守る役目に就いてからもうずいぶん経つており、いいかげん何かないと見張りを続けるのも辛いだろうという理由から提案されたようであった。それにあれほど長い間ひとところに留まっているのだ、きっとかかしはその眺めを大変気に入っているに違いないが、しかしたまには異なった景色を見てみるのも目の保養には非常によろしいことで、ならばより遠くまで鮮明に風景を見渡せる眼鏡をプレゼントすることは、かかしにとつては日々の責務に対する何よりの労いになるはずだとも言つた。

僕は彼女との長い付き合いの中で、彼女が以前か

ら度々そういった理解しがたい思いつきを実行に移しては村人たちを困らせているのを承知していたからそれほど驚きはしなかつたけれど、いくらかかしがいつも独りで同じ場所に変わらず突っ立っているからと言つて、それはそこから見える景色をかかしが特別に愛してそうしているという訳ではないのではないか、とだけ言つておいた。

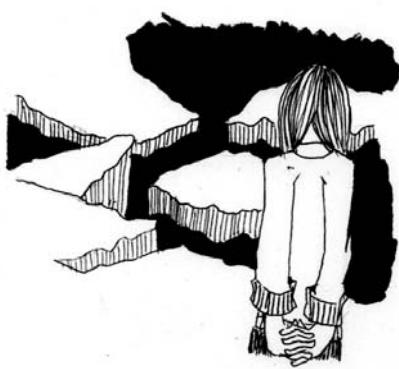
彼女はそつか、と小さく溜息をついて、だつたら眼鏡なんてあげても仕方ないかなあ、とひどく落胆していた。計画をすぐに反故にするのも彼女の悪い癖だ。

でも、彼女がとても純粹であることを、僕は知つてゐる。

じゃあ、どうして?
ん?
どうして、かかしはあそこにいるの?

僕は少し悲しげな、それでいて物分かりの良さそうな顔をして（自分で言うのもおかしな話だが、その時の僕は間違いなくその様に形容されるべき表情をしていたと思う。かかしについて話をするとときは、みんな申し合せたようにそういう顔をしてみせるのだ）、そういうものだからだよ、と諭すように答えた。今のかかしも、先代のかかしも、その前の更にうんと昔のかかしも、彼らはずつと同じところにて、同じ景色を見つめ続けていたんだ。それはこの村では当たり前に当たり前な当たり前の習慣で、だからこそみんなは幸せでいられる。みんなかかしに感謝しているんだよ。

わからないよ。彼女は呟いた。かかしの幸せは



そう言つて彼女は唐突に思い出話を始めた。僕は以前にも一度その話を聞いている。それは彼女が前かかしはみんなに幸せをあげるんだ。
ねえ。あたし、かかしをあそこに連れて行きたい。

かかしのはなし

わからないよ。彼女は呟いた。かかしの幸せは

に訪れたひどく寒い北の地でのことで、遠出を嫌がる僕に痺れを切らした彼女は、遠く離れた雪国まで一人で旅立ってしまったのだ。みんなは彼女を非常識だと言つたけど、僕はそんな彼女の自由を羨ましくも感じていた。

旅行から帰ってきた彼女は、山の様な土産話に添えて、僕に一枚の写真を見せてくれた。そこに写された風景を、僕は今も忘れないままにしている。流水というのだろうか、知らない海に、見上げるほど大きな水の塊がいくつも浮かんでいる、僕が生きる世界から遙か遠い、その情景を。

なんだかおそろしいね、と僕は言つたと思う。

彼女は何と言つて返したんだっけか。

そんなの無理だよ。

どうして無理なの？

どうしても無理なの。

彼女は悲しそうだった。そんなのつてないよ、と首を横に振つた。好きな人にそんな表情をさせてし

まつたことを僕は後悔したけれど、僕は間違っていないのだ。きっとみんなそう言つてくれる。だから僕はそれでこの話をしまいにして、自分の作業に没頭することにした。彼女はまだ何か言いたそうに時折こちらに視線を寄越していたものの、僕がだんまりを決め込んでいると、遂に諦めたのか、再び無言で手を動かし始めた。

それきり、しばらくは沈黙が続いていた。僕と彼女にはそれぞれやらなければならないことがあつたし、僕はどちらかと言えば静謐を好む人種であつたため、このまま今日も時間が過ぎて、彼女が自分の部屋に戻り、僕は僕でそこそこに仕事を切り上げて眠り、いつも明日が来るのを待つことを望んだ。かかしはそういうみんなを見守つていてくれる。ずっとそうしてきましたのだ。

あんな話をしたからだろうか、いつのまにか、僕の頭はかかしについて考えていた。かかしは今頃、どうしているのだろう。夜が更けたこんな時間になつても、変わらず暗闇に立ち続いている独りぼっちのかかしを想像した。

あんな話をしたからだろうか、いつのまにか、僕の頭はかかしについて考えていた。かかしは今頃、どうしているのだろう。夜が更けたこんな時間になつても、変わらず暗闇に立ち続いている独りぼっちのかかしを想像した。

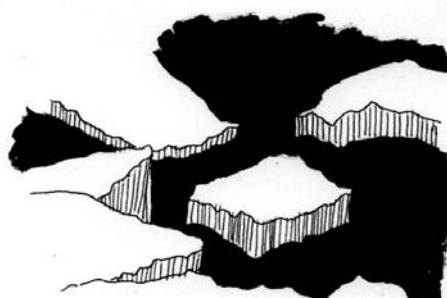
眼鏡を貰つたら、遠い地に連れて行つたら、かかしは喜ぶのだろうか。

時の進む音だけがする。彼女はまだ、黙つていた。

次第に僕は、何か伝えなければならないことがある様な気がして仕方がなくなつていて。彼女をあれだけ無視しておいて。しかし気持ちはひどく焦るのに、いつまで経つても適當な言葉が出てこない。それは例えば、どうしてそこまでかかしにこだわるのかと、いう非難じみた疑問であるとか、或いは、これからも一緒に居て欲しい、という唐突な告白であるとか。でも、それら全てが何だか僕の勝手な言い分に思えてしまつて、結局僕は、その沈黙を破ることができなかつた。

そうしている内に、彼女が自分の部屋に行く時間になつた。僕は内心焦りを覚えながら、今日はもう遅いから部屋に戻りなさいと言つた。彼女は素直に小さく頷いて、ただ立ち去る直前、背を向けたまま、最後に僕に質問をした。

かかしのはなし
ねえ。



なに？
かかしに幸せをあげるのは、いけないこと、なの？

どう答えればよいのか分からぬ僕は、多分、間違つてしまつた。

いけなくはない。でも、いるないことだよ。
嫌なの。
……。

間違つてしまつたのだ。

「あたしはそれじや嫌なの。」

かもしれない、その度に新しいかかしが用意されていたのだろう。それもそういうもののなのだとと思う。そしてまさかというかやはりというか、彼女もいなくなつていた。部屋の机の上の書き置きに、北へ行きます、今までありがとう、とだけ残して。彼女はまた、旅立つてしまつた。そしてこの村に戻つてくることはもうきつとないのだろう。だつて今回は一人じゃないのだ。彼女にはかかしがいる。彼女とかかしの無事を祈る。

翌朝になつて、かかしがその姿を消しているのが発見された。噂は一日で村中に広がつたので、直接確かめにいくまでもなく、僕の耳にも自然とその事件は伝わつてきたのだ。村を見守るかかしがいなくなつてしまつて、これは大騒ぎになるのではないかと僕は内心穏やかでなかつたのだけれど、村のみんなは意外なほどかかしに執着を見せなかつた。しかしそれでも、そう遠くないうちに次のかかしが立てられるのは間違いないと思われる。みんなにとつて重要なのは多分、かかしそのものではなかつたのだ。もしかしたら過去にも同じ様なことは起きていたの

に入つた眼鏡を見つめた。どうやら彼女は計画を実際に移す寸前だつたらしく、深いトルマリン・ブルーの包装紙でラッピングされたそれには、ご丁寧に純白のリボンまでかけられていた。少しためらわれたが中身を取り出して、彼女の好みであろうその細身の銀縁眼鏡をかけてみたところ、なんとそれは度の入つていらない伊達眼鏡だった。彼女は遠くの綺麗な景色を見せてあげたいと言つていたのに。

僕は彼女じやなくてこの村を選んだ。選んでしまつたのだ。ガラス越しの世界が不意に歪んで、意味

ないじやねえかこんなの、とだけ、言葉が漏れた。

